

6 音 楽 科

川口万里・福田秀範

1 音楽科が大切にしたいこと

音楽は、人間が感じ取ったときに初めて存在するものであり、聴いて感じた以上の音楽表現はあり得ないと言われる。つまり、音楽科の学習は、子ども自身の心で感じる事が学習の出発点であると考え。音楽科では、音楽活動が「なんて音楽っていいんだろう。」という音楽のよさを感じる体験となり、それが土台となって、生涯にわたって音楽を楽しんでいくことができる力を子どもたちの内面に培っていく授業づくりをめざしている。ここで言う音楽のよさとは次のような2点を考えている。

- ①音楽は、音を通して自分の感情や様子を時間の流れで伝えることができるよさ。
- ②芸術の一つとして、音楽には固有の楽しさや美しさがあり、表現や鑑賞を通して人々にその楽しさや美しさが共有されていくよさ。

音楽科では、授業でこの音楽のよさを感じる体験や、人やもの（音）とのかかわりの中で、仲間とともに音楽のよさを感じ合う体験を大切にしたいと考えた。そのための支援のあり方を探っていききたい。

2 音楽科でめざす「自立に向かう子ども」の姿

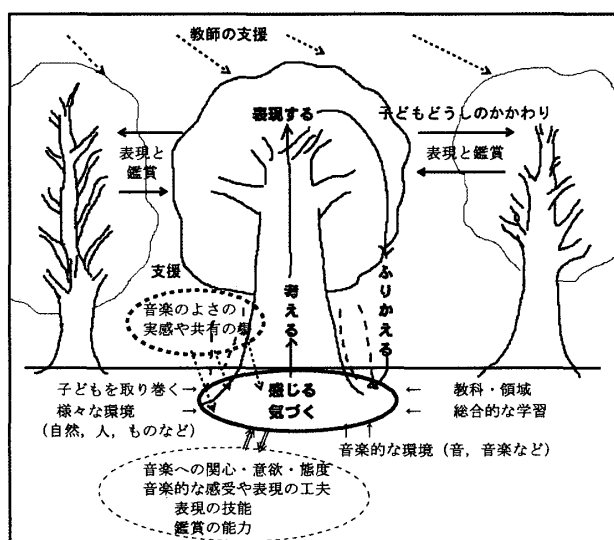
「音楽のよさを感じ、自ら音楽を楽しんでいる子ども」

- 自分で歌を歌うことや、楽器を演奏することに楽しさを感じている。
- 自分で音楽や音楽表現をつくる楽しさを感じている。
- 様々な音や音楽とかかわることを楽しんでいる。
- 音楽科で学習したことを、生活の中で進んで生かしている。
- 人と人とかかわりの中で音楽活動することにより、音楽のよさを共有している。

3 「自立に向かう子ども」を育む授業の具現化

(1) 子どもの学びと教師の支援

子どもたちの身の回りには、様々なものがあり、その中に音や音楽も存在する。そのよさを感じるか、気づくかが音楽を学習する上で重要である。つまり、感じる、気づくことを出発点にして、音楽の学習は始まり、考える・表現する学習へと進んでいく。これは根から栄養を吸収し、芽を出し、葉をつけ、幹を太らせ、花や実をつける木の成長と重なる。図で示すと右のようになる。根は「感じる」「気づく」部分、幹や枝は「考える」部分、葉や花や実が「表現する」部分である。ここは、いろいろな葉や花や実が存在する



ように、人それぞれの音楽表現が生まれる部分である。このように成長した子どもたち（木々）が、自分の思いを表現し合い、互いを鑑賞し合うことで、ともによりよく成長していくことがかかわることの大切さとする。やがて葉や花や実が落ち、次の栄養となって吸収されていく様子を「ふりかえり」、つまり次の表現へ生かされていく姿と見る。この「感じる」、「気づく」、「考える」、「表現する」、「ふりかえる」という一連の活動を繰り返すことにより、音楽のよさを感じ、自ら音楽を楽しもうとする子どもが育まれる。この成長に不可欠なものは、太陽の光や肥料や水のような教師の適切な支援である。また木自らが成長しようとする力、つまり子ども自ら成長しようとする力もまた不可欠である。

(2) 音楽学習の出発点「感じる」「気づく」を豊かにする支援の在り方

① 音楽のよさを感じる体験にしていくために

- ・ 教材は子どもに愛好されるもので、しかも心情を揺り動かすような魅力のあるものを選択する。他教科や総合的な学習との関連も図り、音楽のよさを生かしていく。
- ・ 学習過程は、音楽に向かっていく子どもの気持ちを大切に、それに沿った展開づくりを心がけていく。
- ・ 題材を通して音楽科がつけたい力は何かを常に意識し、指導と評価の計画を立てて実践を行っていく。

② 仲間とともに音楽のよさを感じ合う体験にしていくために

- ・ 教材との出会い、人との出会いから生まれる感動体験を大切に、そこから自分の表現への意欲が高まり、追究の見通しがもてるようにする。
- ・ 子どもの音楽へのイメージを大切に、それを自分で決めた様々な表現活動を通して、自己実現できるような場を設定し、達成への満足感がもてるようにしていく。
- ・ 自分で決めた表現活動などがより実現可能になる場として、同じ思いの子どもどうしのグループ学習を積極的に取り入れ、仲間と協力して表現することによって得られる音楽のよさを感じ合えるようにしていく。

4 サブテーマ「人やものとかかわることを大切に」しとのかかわり

「音を楽しむ」活動を進めていく上で重要なのは、音を大切にする姿勢を身につけることである。ここに、「自分と音とかかわり」を深めていく必要性が見出せる。そして音楽は、集団で音楽表現を工夫することにより、音楽を媒介にした人と人とかかわりが生まれ、自己の存在の大切さに気づいたり、表現にかかわる責任感や連帯感、表現し終えた時の達成感、充実感など、一人では為し得ない感動を共有できるよさもある。さらに音楽は、表現することで人を楽しませたり、自分も楽しんだりできるよさ、また鑑賞することで、演奏者が味わった音楽のよさを自分のものとしてともに感動できるよさもある。音楽のよさは、このように人と人、人やもの（音）とかかわることなくして味わえない。

5 総合的な学習とかかわり

音楽科では、自分の思いを音や音楽で表現する力を高めていく手立てとして、これまでに総合的な学習との関連を図った授業を実践している。表現力を高めていくには、表現の源となる自分の内面が豊かになることが重要である。この内面の耕しは、音楽科だけではなく、他教科・領域にわたる子どもの生活体験、身の回りの環境全てにかかわる。本校で実践している総合的な学習は、直接体験を出発点として、子どもたちにたくさんの感動体験を与え、内面を豊かにしてきた。そこに音楽科が積極的にかかわっていくことで、より一層の表現力の成長が期待できると考えている。今後も研究実践を積み重ねていく。

6 成果と課題

音楽科における本校の考える基礎・基本を明確にする手だてとして、「感じる」「気づく」「考える」「表現する」「ふりかえる」を軸にした学習過程を設定し授業づくりを試みた。本年度は特に「感じる」場、「気づく」場を大切にし、子どもの表現への意欲や工夫がどう高まり、広がっていったかを検証していく。

(1) 「感じる」「気づく」場を大切にしたい支援について

「感じる」「気づく」場は、子どもが教材のもつよさや楽しさを実感する場である。この段階で、よさを感じとった子どもは、歌いたい、楽器で演奏したいなどの意欲につながり、自分から進んで表現しようとする姿が見られた。教材との出会いの場は、今後も丁寧に考えていきたい。また、子どもたちの気づきや感じ方も多様なものがあるので、できる限り個に応じた表現活動に広がっていくような学習過程を工夫していく必要がある。

子どもたちの「感じる」「気づく」を大切にしていきたい場合、求められる子どもの能力はじっくりと聴く力である。どんなに音楽が流れていても、自分から聴こうとする姿勢がないと「感じる」「気づく」場にはなり得ない。ここに音楽科の考える基礎・基本を考えていくヒントがあると考えられる。

「音楽のよさ」とは何かを文章化してみたが、子どもたちに感じてほしい、共有してほしいと思われる「音楽のよさ」とはなにか、という段階までには明確にしきれていない部分があった。「よさ」とは何か、「楽しさ」とは何かをもう一度整理し直し、学年の発達段階に応じたものになるように、検討していきたい。

(2) サブテーマ「人やものとかかわることを大切にしたい」について

今年度も学年を越えた交流授業を取り入れた。3年生が地元のお年寄りに教えていただいた唄を2年生に伝承する授業。中学生と小学生が互いの練習の成果を鑑賞し合う授業。自分が受け継いだものをしっかりと伝えていきたい、これまで練習した成果をしっかりと聴いてもらいたい、など交流する中で、表現意欲を高めていく姿が多く見られた。今後は鑑賞する側の意欲の向上を意識した授業づくりを行っていくことが課題となる。人が演奏しているのを、単なる客として聴くのではなく、学習者としてどのような意欲をもたせていくかを明確にした上で、その後の自分の表現活動に生かされるようにしていきたい。

音とのかかわりは、低学年からの積み上げが大切である。1・2年生での身近な音に着目し、表現活動に結びつける活動は、確実に小さな音にもじっくりと耳を傾けて聴く力を伸ばしてきた。この力は単に音を聴くだけにとどまらず、自分たちの歌声にもよい効果をもたらしている。自分たちのめざす歌声を上級生の演奏やCDなどの音源で鑑賞することによって、子どもたちは自らよい歌声に近づこうという意欲を高めることができた。他学級、他学年の歌声を聴き合う場は、授業にとどまらず、全校で行う音楽朝会や校内放送などの機会を利用し、さらに広げていきたいと考える。

(3) 総合的な学習とのかかわりについて

総合的な学習に音楽科がどうかかわるかの見直しを行った。子どもたちの直接体験から出発し、そこから課題を自分で設定し、自分なりの方法を工夫して追究し、表現していく学習過程において、音楽科がどこで関連を試みるのかは今後検討していく必要がある。総合的な学習との関連を試みることで、子どもたちの表現に対する意欲の高まりを引き出すことができた。今後は、総合との関連を図ることで、どのような表現や鑑賞の能力がついていったかを検証していく必要がある。